1分間に17人（内12人が子ども）
1日に2万5,000人
1年間では約1,000万人が
飢えのために生命を失っています。

一般財団法人
日本国際飢餓対策機構

2018 4 No.333

飢餓対策ニュース

わたしから始める、世界が変わる

ロヒンギャ難民キャンプにて（緊急支援募金を継続中）

平和の道、分かち合うこと

日本国際飢餓対策機構 理事長　清家弘久

先日、ある国で難民支援を続けておられる方の報告を聞きました。その方の淡々と語られる口調とは裏腹に、難民の方々の想像を絶する過酷な状況に私は胸がかきむしられる思いでした。自分の国を離れたくはないが、離れざるを得ないつらさ、さらに逃げ延びて来た所で受ける肉体的、精神的な苦痛、彼らの過酷な人生を思うとJIFHとして一刻も早く支援に加わっていくべきであると思わされました。

先月号でミャンマーからのロヒンギャ難民支援の要請と活動報告を掲載させていただきました。その記事中にラシュダルさんの「ある日突然、村が襲われ、友人、親戚が老若男女問わず殺され、5日間歩いて難民キャンプにたどり着いた」というインタビューがありました。またインターネットでロヒンギャ難民キャンプの14歳の男の子の凄まじい体験記事を目にしました。それは突然、ミャンマーの国境警備警察（国軍ではなく）が村にやってきて自分の家族を次々に殺戮し、家に火を放ち、さらに小さな弟や妹たちをその火の中に次々と投げ入れたというものでした。彼自身は近くに身を潜めていたため難を逃れることができましたが、悪夢を振り払うかのようにして必死に逃げ、ようやくバングラデシュの難民キャンプにたどりついたそうです。

「過酷な運命」という言葉で片付けられない、いや片付けたくない現実が今も世界で起こっています。シリア、北朝鮮、中央アフリカ、南スーダン、コンゴ、ナイジェリアなどさらに多くの国で、今日も多くの命が奪われ、幼い子どもたちが犠牲になっています。難を逃れてきた人々に手を差し伸べるとともに、一方で復讐はまた新たな戦争の火種となっていくことを、援助する側も受ける側も学んでいかなければなりません。

かつてガンジーが「目には目をと言われている、それではすべての人を見えなくしてしまう」と言いました。聖書には「いのちにはいのちを与えよ」と書かれています。取るのではなく、与えよなのです。数年前「倍返しだ」というセリフが流行りました。しかし、そのことが行われ続けたらこの世界は憎しみで満ちあふれ、破滅の道を歩んでいくでしょう。私たちは取るのではなく、分かち合っていくことをし続けましょう。この世界から紛争や戦争がなくなるまで。

「わたしから始める、世界が変わる！」

エチオピア

クリスマス募金へのご協力感謝いたします！

皆様から募金は「孤児および貧困の中にいる子どもたち」のためのプロジェクトに使わせていただきました。
募金報告：6,574,081円（2018年3月11日現在）

2018年1月のアムハラ地方のレイ・ゲイント、タック・ゲイント、シマダ地域でFHの支援を受けた孤児の数は、男女合わせて1,400名でした。

［ 健康サポート ］

15人の子どもを医療機関で治療

病気の早期の診断と治療を行って合併症の発症をさけるために、子どもが病気にかかった場合すぐに診療所に連れて行くようすすめました。その結果15人の子どもが医療機関で治療を受け、その費用の支援を行いました。子どもたちは健康が回復し学校に続けて行くことができています。

手洗い講習を受ける子ども

［ 地域サポート ］

3地域から35名集まってリーダー研修

FHは孤児や貧困家庭の子どもの両親、後見人、地域パートナーと相談して、子どもたちの家庭が収入向上を目指してビジネスを始めるための借り入れができるよう、地域リーダーのワークショップを行いました。合法的な登録をするために、地方政府関係者や小規模金融の会社などからも適切な代表者に来てもらった結果、3つの地域から35人が参加しました。

FHのソーシャルワーカーによる家庭訪問

［ 教育サポート ］

孤児等にソーシャルワーカーを配置

子どもたちの将来の暮らしが改善されるために、学校に継続して通い、成績が向上するようにと支援をしています。1月の段階でFHエチオピアが支援している511人の子どもが続けて学校に通い、個人授業のクラスにも参加して成績が良くなってきています。また孤児や貧困の中にある子どもたちには、愛情とケアと他の子どもと同じように生活できるような支援が必要です。そのためにFHでは8人のソーシャル・ワーカーを配置して常に家庭や学校を訪問しています。このプロジェクトの支援を受けている1人、タック・ゲイント地域に住むハブタム・カッサさんからの報告です。

「私の生活は変わりました」

私は14歳、7年生です。お母さんと弟2人と暮らしています。小さい時にお父さんがなくなってから私たちはいつも食べる物に困っていました。学用品を買ってくれる人もいませんでした。私が1年生の時FHのプロジェクトに参加させてもらって私の生活は変わりました。小さい頃から困っていた生活が少しずつ良くなってきたし、学校でも個人授業のクラスに入れてもらって成績が良くなったのです。自分でも変わったなと思うほど自信がついて、積極的に友だちや家族とも話ができるようになりました。FHとFHを支援してくれている人たちにとても感謝しています。どうか続けて支援をお願いします。
暗くて希望のない未来から私たちを救ってくださってありがとう！私と同じような子たちに助けの手を伸ばしてくれる方々に神様の祝福がありますように。

宮城県で行われた追悼記念行事。㊧日本基督教団青葉荘教会（11日仙台市）、㊨ホテル観洋（10日南三陸）での追悼コンサートには上原・森親善大使らも出演（写真右二人）

東日本大震災から7年

「3.11の事実は風化させてはならない」

『わたしたちができること
涙を拭って進むこと』

これは、宮城県で発行されている「河北新報」2018年3月12日の一面の見出しの言葉です。東日本大震災発生から丸7年の時間が経過しました。被害を受けた地域は、それぞれの速度で「復興」という道を歩んでいます。インフラ整備がどんどん進み、災害公営住宅も目に見えて増えています。

一方で、3月11日に仙台青葉荘教会で行われた「東日本大震災追悼記念礼拝」の感想からわかるように「7年の歳月が経った。長いようで･･･との思い。」「心の傷は風化して欲しいが、災害があった事実は風化してはならない。」「何年経っても癒えることのない傷にどのように接すればよいか分からないときがある」など、7年の時を過ごして逆にはっきりと意識にのぼってきたことも被災された人々にはあります。

生き証人としての使命

岩手、宮城、福島の3県合わせて2万2,000人（行方不明者、関連死含む）を超える1つ1つの大切な命が失われた大きな災害を忘れないでいることは、近い将来必ず発生するといわれている災害時の命を守ることにつながります。今年は特に、災害を乗り越えた方が、生かされている意味を涙の中にあってもしっかりと受け止めておられる姿を見せていただいた気がします。震災を知らない子どもたちが増えてきました。けれども、その親御さんや兄姉たちは、あの日を経験しています。その人たちには3月11日がどんな日であるのか、今の風景が、どのようにできあがってきたのか、これから語り続けていく使命を与えられています。

「悲しみの日から命の日」

阪神淡路大震災から生まれた歌「しあわせ運べるように」（作詞・作曲:臼井真）の歌詞にこんな一節があります。『地震にも負けない強い絆を作り　亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていこう』

3月11日は、悲しみの日であると同時に、生かされた『命』を考える日でもあります。災害の発生を防ぐことはできません。しかし東北の姿を見て、失う命を最小限に、いえ1人も失うことのないような取り組みをみんなで考えていかなければならないという思いを強く持ちました。

（緊急援助チーム・伊東　綾）

2018年3月11日 朝の宮城県気仙沼岩月台ノ沢

ハンガーゼロ自販機
災害用備蓄に対応する
自販機設置者を募集中

無料で提供される備蓄用の水とパン缶

お問い合わせは大阪事務所まで

ハンガーゼロ自販機

学校に行けない子どもたち

③ カンボジアの子どもたち

みなみななみ

お前たちも学校なんて行かなくていい!
俺たちも行かなかった
だから学校があっても行けない子たちがいるし中学やその先は行けない子がもっと多いよ
学校には先生はいるの?美術と音楽はあるよね?
↑好きな科目
先生はいるけど
美術と音楽はないわ
え〜美術がないなんて!
私たちは学校で教えている教師だけどお給料が少ないので一日の半分は別の仕事をしてるんだ
子どもたちにちゃんと教えたいとは思うけど私たちを教えてくれる先生もいなかったから教え方も分からない
教科書があればそれを頼りになんとかやってるけど分からないことも多くてね
音楽も美術もぜんぜん教えられないよ
やっぱり学校があってちゃんと先生がいて教えてもらえるっていいね...
テストは好きじゃないけど
ぼくも学校、やっぱり行こう〜っと
カンボジアでも子どもも先生もみんなが学ぶ機会を持てるようになるといいね
他の国の人たちも応援に来てくれてるし少しずつよくなっていくと期待してるよ!

現地での学びと人々との交流から見つけたこと

FHフィリピンの活動地で実施

毎年、国際飢餓対策機構フィリピン（FHP）と西南学院大学が共同で実施しているワークキャンプに、同行させていただき、フィリピンの文化や人々と間近で触れ合える11日間を過ごしました。訪問先は、昨年同様マラボン市トンスヤ（Tonsuya）とサンロケ（San roque）地域です。到着翌日に、FHPが支援している子どもたちの家を訪問し、それぞれの家庭の仕事のお手伝いをした後、昼食をご馳走になりました。また地元小学校の裏にあるマングローブの森の清掃と植林、トンスヤ地域の子どもたちとの衛生教室とスポーツ交流、フィリピンの歴史を学ぶ時間など、一般旅行では見聞きすることのできないフィリピンの一面を体験できました。

参加した15名の学生たちは一様に、自分の置かれている環境とフィリピンの状況をどう受け止めればよいのか戸惑いがあったようです。けれども日を重ねていく中で、フィリピンの人たちの笑顔や気遣いに接し、身構えるのではなく、友人として接していけば良いのだと気持ちが変わっていった様子がみられました。過去の参加者の中には、このワークキャンプを通して将来の進路が変わった人もあります。

校舎の壁（背景）に絵を書くワークを終えて

交流プログラムのためトンスヤ地区を訪れる学生たち

ボートに乗って清掃活動に参加

人間の『逞しさ』を学ぶ

11日という長くはない時間でしたが、自分と世界の現状に向き合えたことは、学生たちにとって、教科書から学べる以上の『何か』を得るきっかけとなったことでしょう。私自身もフィリピンとそこに暮らす人々から人間の『逞しさ』を学ぶことができました。

人々が貧しいから何もできないのではなく、自分が現在持っている中で何ができるのか、それをどう生かしていけば良いかに気付き、一歩踏み出すお手伝いをしていけば、一緒に世界を変えることができることを確信してFHは活動をしています。

報告：伊東　綾（JIFH）

あなたも国際交流しませんか
8月にウガンダサマーキャンプ
最終頁の案内をご覧ください。

西南学院大学参加学生の声

精神的な豊かさに触れた

フィリピンの知識が全くなくここに来てしまった。数日過ごしてみて、現実として物資的な貧しさがあるけれども、子どもたちは楽しそうに学校に通っているし、大人たちもとても親切にしてくれます。そういう意味では、精神的な豊かさにたくさん触れられました。（浅倉瑞歩さん）

教員になった時に伝えたい

幼少期に父の仕事の関係でフィリピンで過ごしました。その時に現地の方々が優しくしてくれた。フィリピンと日本の過去の歴史があるのに、みんな笑顔で接してくれる。そんな人たちに何か自分にできることがあるかを探したかった。それから将来教員になった時に、日本の子どもたちに、世界の子どもたちの現状を伝えたいと思っています。（岡崎智美さん）

2018年3月2日JIFHの理事会が開催されました。冒頭にJIFHの創設に関わった、山森鉄直博士から「国際飢餓対策機構（FH)の歴史と今日の国際状況におけるJIFHの役割」というタイトルの講演がありましたのでその一部をご紹介いたします。

【JIFH理事会 特別講演】

国際飢餓対策機構元総裁
山森鉄直博士（創立理事）

講演後は当機構評議員、理事から多数の質問が寄せられた

戦時中の飢餓体験と飢餓で死に行く子どもが重なった

FOOD FOR THE HUNGRY

FH創設者のワード氏が実現できなかった「開発」と「二つの飢餓」に関わることが、私の人生の最優先事項に

車中の祈りから生まれたFH

FHの創設者、ラリー・ワード博士は「Christian Life and Christianity Today」誌の編集長でしたが1970年代のある日、カリフォルニアの高速道路で車を運転中に突然、飢えが原因で毎日死んでいく12,000人の子どもたちが頭に浮かび、車を道路わきに止めて祈りました。

そして「身体のための食べ物と魂のための食べ物」に焦点をあてた働きをしたいという思いが起こされ、1971年にFHを創設しました。

最初の働きはバングラデシュで戦争から帰還した人たちを支援することでした。以来ニカラグア（地震）、ケニア（干ばつ）、グアテマラ（地震）、フィリピン（戦争難民）。ドミニカ（ハリケーン）での救援活動を次々と行いました。

1979年、ワード氏は、ロサンゼルスのバイオラ大学でカンボジア難民の絶望的な状態について講演を行い、FHと働くために看護師を派遣して欲しいと訴えました。この大学で教鞭をとっていた山森博士は、その要請に応えて看護学生57人と教授2人を伴ってカンボジアとタイの国境にある難民キャンプに行きました。

カンボジアから大学のキャンバスに戻った山森氏は、飢餓で死に行く子どもの顔と第2次世界大戦の日本で子ども時代に自らが体験した飢餓の記憶とが重なり、18年の教授生活を後にしてFHの働きに加わったのです。ワード氏が実現できなかった「開発」と「身体的、霊的飢餓の両方に関わる」という願いを託された山森氏にとって、以来この2つの飢餓のために働くことが人生の最優先事項となりました。

JIFHの誕生（1981年）

山森氏はこの働きを世界に拡大するために、まず日本でのFH創設を堀内顕牧師（JIFH創立理事長）に申し入れ、1981年にJIFHが生まれました。そして1988年には、カナダ、スウェーデン、スイス、89年には韓国、英国、とFHの姉妹組織が世界各地に拡大していきました。

以来JIFHは、世界各国のFHと共に飢餓に苦しむ人々に「身体のための食べ物と魂のための食べ物」を提供する働きとして緊急支援、復興援助、自立開発協力、そして持続可能な社会の実現に向けて支援者の皆様のご協力のもとに共に歩んでいます。この活動を必要とする人々がなくなり、JIFHの使命が果たされる日が一日も早く来ることを願いつつ。

JIFH 日本国際飢餓対策機構

飢餓対策ニュース　第 333 号　発行日 2018 年 3 月 20 日（毎月 20 日発行）定価 15 円

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry：略して JIFH）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体（NGO）です。1981年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、20ヵ国 60のパートナー団体と協力し、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、「こころとからだの飢餓」に応える活動をしています。

★Tポイントを利用して「南スーダン・マブイ小学校給食支援」ができます。現在までに539249ポイント（円）のご協力（5500件）がありました。募金はTポイント募金で検索

お出かけに便利なポシェット

～ボリビアの生地を使用～

スマホ、メガネ、500mmのペットボトルも入りますので、行楽時などのお出かけ用にどうぞ。
1つ1,000円（送料200円）ポストへのお届けです。（※色、デザインはおまかせ）

- 3個以上1箇所へのお届けの場合は送料無料
- チャイルドサポーターの方は送料無料（会員番号をお知らせください）

収益の一部をＪＩＦＨの活動に寄付させていただきます。

【お支払いは後払い】
郵便局払込で㈱キングダムビジネス口座へ。
【問合せ】キングダムビジネス
〒540-0026 大阪市中央区内本町1-4-12 NPOビル402
TEL:06-6755-4877　FAX:06-6755-4888

不要な本や CD で活動支援!!

『本deリンク』を活用ください

読み終わった本や漫画、CD・ゲームソフトを換金して、支援に用いさせて頂いています。この春の引っ越しや部屋の片付けの際にもぜひご活用ください。まずは**愛知事務所へお問合せください。**

【お願い】破れや汚れ、書き込みのある書籍、個人出版、文学全集は換金対象外。CDやDVDのケース割れ、ジャケット、歌詞カード不備、海賊版、個人用、カセットテープやVHSビデオも不可です。送付先は愛知事務所となります。

8月17～27日に決定！ ウガンダサマーキャンプ

正式募集を始めました

当機構の支援地アフリカのウガンダで行う「サマーキャンプ」では、貧困の中から自立に取り組んでいるお話を聞いたり、子どもたちの家庭を訪問したり、楽しい交流プログラムを持ちます。国際協力の実際を知る機会となると同時に、将来この分野で働きたい人にとっても、よい学びとなります。
ぜひ参加を検討してください。

募集人数：11名（高校生以上）
費用：335,000 円（6/10までは33万円）
※上記以外に空港使用料・税、燃油サーチャジなど要。
お申し込みは、JIFH 東京 03-3518-0781

▲案内はHPからダウンロードできます

ハンガーゼロサポーターを大募集中!!
現在までに 4465口

今すぐ▶▶▶各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

- ☐ ロヒンギャ難民緊急支援
  一時募金として（　　）円
- ☐ ハンガーゼロサポーターとして協力します。
  毎月（　）口　（1口 1,000 円）
- ☐ チャイルドサポーター（子ども1人 4,000円）に
  なりたいので説明書（申込書）を送ってください。
- ☐ 海外スタッフサポーターとして協力します。
  毎月（　）口　（1口 1,000 円）
- ☐ JIFHサポーターとして協力します。
  毎月（　）口　（1口 500 円）
- ☐ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
- ☐ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名：　　男・女

〒
フリガナ
住所：

（電話）

▼申込日：　年　月　日▼NL 333 号

FAX・072-920-2155

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所（八尾市）、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業の協力をして下さっています。

■発行者　清家弘久
■発行所　一般財団法人　日本国際飢餓対策機構
Webサイトアドレス　http://www.jifh.org/
eメールアドレス　general@jifh.org
フェイスブック　https://www.facebook.com/hungerzero
ハンガーゼロで検索！
■募金方法　※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウエブサイトで
●郵便振替　00170-9-68590 ／日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替●クレジット、デジタルコンビニ
今すぐ募金ができます！　かざして募金

大　阪　〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
（広島）　TEL（072）920-2225　FAX（072）920-2155
東　京　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCCビル 517 号室
（東北）　TEL（03）3518-0781　FAX（03）3518-0782
愛　知　〒460-0012 名古屋市中区千代田 2-19-16 千代田ビル3F
TEL（052）265-7101　FAX（052）265-7132
沖　縄　〒900-0033 那覇市久米2-25-8　メゾン久米 202号
TEL（098）943-9215　FAX（098）943-9216
ＵＳＡ　Ainote International c/o Mr. Takehiko Fujikawa
8010 Phaeton Dr. Oakland, CA94605
TEL(510)568-4939　FAX(510)293-0940

JIFH
チャイルドサポーター

「かざして募金」はスマートフォンからご利用できます。募金は、ソフトバンクモバイル（株）経由となります。詳しくはウエブサイトをご覧ください。